
もどきども 第三話「vs.おぼれるマーメイド」

維川 千四号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もどきども 第三話「vs・おぼれるマーメイド」

【Nコード】

N2177M

【作者名】

維川 千四号

【あらすじ】

現代活劇ファンタジー“もどき”第三弾。

今回の対戦相手は「人魚・マーメイド」。

しかし、遊泳・自在のマーメイドが“おぼれる”とは、これ如何に。

***序* (前書き)**

現代活劇ファンタジー“もどき”第三弾。

次なる対戦相手は「人魚」。

お時間のある方も、ない方も、一読して頂けたらありがたい限りに
ございます。

序

「お兄ちゃん、遊ぼうよ！」

無邪気な笑顔で、彼女はそう言った。

……………。

…………… 曲線美。

彼女の姿を目の当たりにして、オレはその意味を理解した。

曲線美とは、女性のためにある言葉なんだ、と。

陶磁器のように白く、力加減を誤れば折れてしまいそうに細く、
だけどしなやかな強さのある首筋。

熟れた果実のように丸々と、スイカやメロンというよりグレープ
フルーツみたいな、決して重力に負けることのない胸元。

ひょうたんや砂時計を彷彿させる、まるで反比例のグラフのよう
に、しかしあくまでも自然なラインを描く腰回り。

熱帯魚さながらの鮮やかな青い鱗に包まれた、イルカのように滑
らかな下半身 　　というか尾ビレ。

そう、彼女は人魚だった。

しかし、一般的なイメージとは大きく違う。

下半身は魚で、上半身は人間。これは合っている。だけど人間の
部分に問題があった。

貝殻的なモノでなく、競泳用水着を着ているのだ。

よって、肌の露出は極めて低い。見えるのは肩から下と、首元か
ら上だけだ。

だがしかし、どうだろう？　これはこれで。

隠れているとはいえ、曲線美と言うに相応しいそのボディライン
ははっきりと見えている。

下手に露出しているより、想像力が働く。

その黒光りする布キレの向こう側への、好奇心が騒ぐ。

得体の知れない感情が、心の奥底から沸き上がってくる。

……もしか？ もしかして？

もしかして、これが？

もしかして、これが男子高校生なら誰しもが秘めているという、

あの有名な感情なのか？

その名も。

起

左腕が痛い。

いや、左腕だけじゃない。全身くまなく痛い。

鋭く長い針で突き刺されているように。何度も何度も貫かれるように。

熱い、とは思わない。

痛い、としか思わない。

火傷なんてそんなモンだ。熱いと感じるのは最初の一瞬だけ。

そうだ。これはただの火傷だ。

ちよつと炎を浴びただけだ。

だから、オレはまだ戦える。

戦わなくちゃならねえ。

約束を 果たすんだ。

「も める だ、チ ル ン！」

は？ 何言ってるんだ、ヴィアン？

よく聞こえねえよ。ちゃんと喋れよ。

つーか、手を離せよ。

「こ 以上 理だ！ 君 精神 死 し う！ の子 夢か
出 なく る！」

うるせえな。耳も痛いんだから騒ぐなよ。

つーか、そんなことはいいから手を離せよ。

くそ、なんで振り解けねえ？

なんでこんなに右腕が重てえ？

なんでこんなに身体が動かねえ？

なんで そこにオレの左腕が落ちてる？

「今日 退 だ。相 が悪 ぎる」
ダメだ。

今日じゃなきゃ、ダメなんだ。

オレは、アイツを倒さなきゃならねえんだ。

「ど せ明日 は やんは何 覚 ない だ」

……あ？

今、なんて言った？

なんて言いやがった？

ちゃんと聞こえるように、もう一回言ってみてくれよ。

もう一回言ってみるよ。

「もう一回言ってみるよ！」

「おはよう、蒲原^{かんはら}」

昼過ぎ。津々浦^{つづつ}第二高校。教室。

何故か分からないが、クラス全員がオレのことを見ている。

何故か分からないが、二つ隣の席^{せき}の結城^{ゆづき}はこめかみを押さえている。

何故か分からないが、目の前に国語教師・魚住^{うおすずみ}愛海^{まなみ}が笑顔で立っている。

「もう一回と言わず、何回でも言ってみるぞ。おはよう、蒲原。おはよう、蒲原。おはよう、蒲原。」

……。

……頭の回転の速いオレの結論としては、オレは授業中に居眠りした上にガツツリ寝言を吐いたようだ。

しかも、よりによって魚住さんの授業で。

だから、言うべき言葉は一つしかない。

「蒲原じゃなくて薄原^{うすはら}です。字は似てますけど全然違います」

「ほう、そのくらいは分かるみたいだな」

あまり教師とは思えないラフで若々しい（実際まだ二十代だけど）服装で、魚住さんは笑みを浮かべ続けている。

「ええ、オレは違いの分かる男なんで」

「ほほう、お前はずいぶんとイイ男だったんだな」

「ええ、まあ。よく言われます」

「ほほう。じゃあ私は、イイ根性してるな、と誉めてやろう」

「いやあ、そんなに誉めても何も出ませんよ」

「いやいや、出してもらわないと困るんだよ。特に、今の問題の答えを」

と言つて、オレの目の前から横にズレる魚住さん。

それによって見える黒板。そこに書かれた白い文字（国語教師なのに意外と汚い）。完全完璧に見覚えのない文章。

一応、自分のノートを見てみるが、一字一句同じ言葉はない。それどころか『何者か』によって描かれた黒い一本の乱れた線が、ノートを縦断している。

おそらく、睡魔という悪魔の仕業だ。

くそ、次に会った時は必ず退治してやる。

……………。

まあ、つまり、単純に、明確に、結論的に言えば

「分かりません」

「そうか、それなら仕方ないな」

と、笑顔のまま魚住さんは、

「鉄拳制裁！」

オレの頭頂部目掛けて拳を放った。

「いつてえ！」

すぐさま頭を押さえるオレ。いつも正確に髪の毛のガードがないつむじを狙ってくる一撃は、地味な痛みがしばらく続く。

「私の授業で寝るからだ、阿呆。寝るなら次の田口先生の授業にしろ」

「いや、寝ること自体ダメでしょうよ」

いや、今さっきまで寝てた自分が言うのもアレだけど。

確かに田口（世界史のおじいちゃん先生で、八割何言ってるのか分からない）の授業はほぼ寝てるけど。

でも、教師が言っちゃダメだろうよ、それ。

「ちなみに」

と、オレに背を向けて黒板に戻りながら、魚住さんは話を続ける。

「今は何一つ問題を出してねえよ、蒲原」

「……………」

……………ハメられた。

「それじゃ、あんな風になりたくないヤツはしっかりと授業を聞くように。特にココはテストに出やすいからな。というか、次は私が作るから絶対忘れんな。そしてクラスの平均点上げる」

……………いや、教師が言っちゃダメだろうよ、それ。

いくらこのクラスの担任でも。

という、オレのモノローグなど聞こえるわけもなく、授業を再開する魚住さん。

一年のときからの担任で、世界で二番目に逆らえない天敵（一番はもちろん姉ちゃん）。

そして何より、今回のお話の対戦相手・おぼれるマーメイドである人物。

だけど、このときのオレはお約束通り、まだ何も知らない。

* 承 *

放課後、夢守神社、オレの部屋。

「改めまして、津々浦第二高校生徒会長をやらせてもらっている大神征志郎です。この度は大変なご迷惑をお掛けしたのと同時に、命を救って頂き本当にありがとうございます」

と、大神さんはまるで武士のように正座の状態で頭を深々と下げた。

「いえ、こちらこそ御馳走様でした。っと、僕もちゃんと挨拶しとかなないとけないな、大人として」

と、こつちもしつかりと正座して流暢に日本語を喋る外国人つまりヴィアン。吸血鬼“もどき”。

「現在、チルチルくんの家に居候させてもらっている女郎花初庵です。気軽に『ヴィアンちゃん』って呼んでね」

「了解です、ヴィアンちゃん」

.....

.....

.....え？

「ヴィアン。今、なんて言った？」

「ん？ 『のことかい？ 残念だけどこれ単品では発音できないよ って、今僕が 『 って言えたのは一種の文章表現としてスルーして頂戴ね」

「ああ、積極的にその話丸ごとスルーしてやる。今の問題はそこじゃねえ」

「つーか、会話を文章って言うんじゃないわ。世界観崩れるわ。いや、世界観って言うてる時点でアレだけどさ。」

「それじゃ、今後もし僕が 『 (笑) 『 っって言っても、それもスルーの方向で」

「それは断る。その表現は鉤括弧の外でしろ」
「つか、それは完全に作者の技量の問題だ。」

「ええー。心と縦幅が狭いなあ、チルチルくんは（笑）」

「……………」
この野郎、オレが今一番気にしていることを『（笑）』で言いやがった。縦幅、つまり身長のことを。

現在この部屋にいるのは、ヴィアン・大神さん・オレ。

長身・長身・チ 普通。

この二人に挟まれたら、間違いなく『あの光景』になってしまう。だからオレは、この部屋での立ち位置に細心の注意を払っている。……何度も言うようだが、オレが小さいわけではない。二人が大きいんだ。そして世界が大き過ぎるんだ。

「で、なんの話だっけ？」

と、仕切り直すヴィアン。

「確か、イルカとクジラの違いでしたよ。ヴィアンちゃん」

と、助言する大神さん。

「いやいや、そんな話は欠片もしてませんよ」

と、否定するオレ。

「いやいやいや、大神くんは存外間違つてもないよ。イルカとクジラの違いは単なる大きさの違いだからね。さあて、一体チルチルくんはどちらに分類されるんだろうかね？」

「……………」

「いよいよ本気で殺してえ。この『（笑）』の吸血鬼“もどき”を。」

…… 聖水つてどこで売ってんだろう？ 通販とかで買えるのか？

「おや？ 何やら物騒な殺気を感じるね。妖怪アンテナがバリ3つて感じだね。さすがにこの話題はそろそろやめところか、僕の命的に」

まずはどの通販サイトを見てみようかと迷っているオレの妖気を察知して、ヴィアンは話を進める。

「老若男女の『女』に一族郎党の『郎』に鏡花水月の『花』で『女

郎花』、初志貫徹の『初』に沢庵和尚の『庵』で『初庵』、それで女郎花初庵。それが僕の真名　　なんて大層なものでなくて単なる本名だよ」

「よし。何故わざわざ文章じゃないと分かりにくい四字熟語で説明したのかと、最後のは四字熟語じゃねえのと、散々ネットで『庵』の入る四字熟語を探したが結局見つからなかった作者の裏話はひとまず置いて、そんなこと初めて聞いたぞ」

「つーか、天然の灰色の髪にその顔で日本人だったのかよ？」

「あれ？　言つてなかった？　……まあ、あんまり気にしないでイイよ。所詮は心身共に吸血鬼“もどき”になった時に殆ど捨てた名前だから。以上でも以下でもなく、今の僕はヴィアンそのものだからさ（キメ顔・カメラ目線）」

「おいコラ、どっち向いて喋つてやがる？　つーか、自身のオリジナリティに悩んだ拳句『そうだ、オレはオレでしかないんだ！』と結論付けた中学生の発想を、いい歳のおっさんがキメて言うな。そして何より、鉤括弧内で状況説明をするな。そろそろ作者の技量が本気で疑われるわ」

まあ、元々ないモノだからね（笑）。

と、作者がほざいている気がするも、賢明なオレはノールックのスルーパスでそれを無視する。

「いやあ、なかなかの説明口調のツツコミ。語彙の足りない僕としては感心するばかりだよ」

「思つてもないことで褒められても嬉しくねえよ。つーか、軽くバカにしてんだろ、お前？」

「いやいや、滅相もない。いつもいつも僕は尊敬の眼差しで君のことを見てるよ」

「鉤括弧内にならないからって騙されると思うなよ！　今のお前の顔は『（半笑）』だ！」

もし聖水が通販サイトになかったら、ネットオークションでも探してやる！　そして破格（低い方）の値段で落札してやる！

「まあ、言い過ぎた感はあるけど、尊敬してるのは少なからず事実だよ。出会う人全ての相手をするなんて、僕には到底できない」

「……なんとなくまだバカにされてる気がするが、まあ良しとしてやる」

出会う人全てを相手にしたつもりは一切ねえけど。むしろどっちかと言えば、オレは人嫌いの分類だし。でも。

「説明口調のツツコミが、オレのこの世界での立ち位置なんだよ。それこそ、オレがオレである理由だよ。悪かったな」

そんな風にキメて言ってみたが、カメラの位置が分からなかったのが残念だった。せめて後頭部のアップでないことを、祈るばかりだ。

「悪くはないさ。存在意義が確定しているってことはイイことさ」
「ホント羨ましい限りだよ、と」(笑)『でも』(半笑)『でもなくヴィアンは笑った。』

「あの。お二方で盛り上がっているところに水を差すようですが、そろそろ本題に入っても良いですか？」

そう言って、若干存在感が薄れかけていた大神さんが切り出した。
「ああ、すいません。で、大事な話ってなんですか？」

今日の昼休み、またも大神さんがオレの教室まで来て「放課後に君の家に寄っても良いだろうか？ 僕たちのこれからについての大事な話があるんだ」と言ってきたので、特に予定のないオレは了承した。……何故か分からないが、そのときクラスにいた女子に変な目で見られたが。まあ、理由を訊くのも面倒だったのでそこはスルーしただけ。

「実は、狼男として暴走していた時の幽かな記憶と、ヴィアンちゃんの話聞いて思っていたんだが」

と言う大神さんの表情は少し曇り始めた。なんとなく気まずそうな雰囲気を感じる。

……もしかして、狼男が再発したのか？

以前ヴィアンが「一度でも“僕ら”に関わると、どうしたって引

かれやすく いや、惹かれやすくなる」と言っていた。だから事後処理こそが大事なんだ、と。

「まあ、命の恩人である薄原くんうすはらにこういうことを言うのもどうかとは思うんだが……いや、恩人であるが故に言うべきだな」

そう決意したように、改めて正座し直すと、

「君には『必殺技』が足りないと思う」

恥も迷いもなく言い切った。

「……、……、……は？」

「これからに備えるには、やはり『必殺技』が必要だと思うんだ」

「……」

……今なら『杞憂』って漢字をすんなり書けそうだ。案外間違いないよ、杞憂の『杞』。

「それでいくつか候補案を考えてみたんだが、聞いてくれないかい？」

「ええ、まあ、聞くだけなら……」

ホントは別にいらないんだけどなあ、『必ず殺す技』なんて。まあ確かにそれこそ、中学生のときは自分のオリジナル技を考えたこともあったけど。……あー、でも対ヴィアン用のなら必殺技があってもいいな。

「ではまずは」

自分の生徒手帳を取り出し、咳払い一つして声の調子を整える大神さん。

「俺のこの手が真っ赤に」

「燃えません」

「ゴムゴムの」

「伸びません」

「影分身の」

「増えません」

……いや、一人だけなら増えるけど。

「つーか、最初のヤツに至ってはロボットの技ですから。せめて人

間が使える技にしてください」

「む、言われればそうだね。では、こういうのはどうだろう?」

もう一度咳払いをしてから、大神さんは続ける。

「みんな、オラに元気を」

「すいません、言葉足らずでした！ 地球人が使える技でお願いしますー！」

残念ながら、オレはスーパーな状態になつたりはしない。

「むう……そう言われてしまうと、今回の僕の候補案に良いのはないな。すまないが次までの宿題で良いだろうか?」

と、本気で肩を落とす大神さん。

「あの、それなら刀系のヤツでお願いします。オレ、素手で戦うタイプじゃないんで」

……いや、あんまり期待はしてないけど。

「確かに、言われてみるとまさにその通り。肉弾戦の技ばかりだな。目から逆鱗とはこのことだ」

「……逆鱗?」

「む。すまない、冗談だ」

「……ああ、なるほど」

「つーか、目を触られたら誰でも怒るわ。」

「では、分かってもらえたところで改めて」

「そう言つて、わざとらしい咳払いをまた一つ。」

学習能力の高いオレは、二回目にしてこのパターンを把握している。だから自分のポジションとして臨戦態勢を整える。

「目から鱗雲とはこのことだ」

「規模がデカい!」

「目から下はうる覚え」

「記憶力低っ！ ほとんど覚えてねえ!」

「目にはウロボロスの紋章」

「憤怒の名を持つ人造人間!」
ホムンクルス

……………。

小休止。息切れ、ネタ切れ。

「よし。では僕はそろそろお暇させてもらうことにしよう」
そう言っただ大神さんは立ち上がった。

「あ、スイマセン。飲み物も何も出さないで」
オレも続いて立ち上がる。

「いや、押し掛けるように来た僕の方こそ申し訳ない。それにそれこそ、今朝から鱗雲が広がっているからね。雨が降る前に帰らないと」

「うわあ、それは憂鬱な話だね。雨の日は髪が纏まらなくて嫌なんだよ」

そう言いながら立ち上がろうとするも、なかなかヴィアンは立ち上がらない。

「ん？ どうした『女郎花』？」

「いやあ、お恥ずかしながらその『女郎花』さんは、何年ぶりの正座で足が痺れてまして」

「……しっかりとしろよ、地球人の日本人」
と、オレは手を差し出す。

普段なら確実にローキックを入れる場面だが、大神さんがいるのでさすがにやめた。

いつもいつもすまないねえ、と年寄り臭いセリフを吐きながらオレの手を掴むヴィアン。そして、一気に立ち上がろうとした。

しかし思ったよりも体重があったので、引っ張られてよろけるオレを、

「おっと。大丈夫かい、薄原くん？」

大神さんが反対の手を掴んで支えてくれた。

「ありがとうございます。ほら、さっさと立てヴィアン」
ちゃんと力を込めて引き上げるオレ。

ヨロヨロだけど立ち上がったヴィアン。
しっかりと力加減をして手を握ってくれている大神さん。

そして、開けっ放しのふすまの向こうの廊下を通り過ぎた
い

や、通り過ぎようとした姉ちゃん。

「捕まった宇宙人みたいね、あんた」

『（鼻笑）』でそう吐き捨てると、そのままのペースで歩いていった我が姉・凜花^{りんか}。

どうやら、オレの天敵ランキング一位の座を誰かに譲る気は、全く微塵もないようだ。

承・続

「もー。私、雨嫌い」

と、結城は唇を尖らせた。

季節外れの大雨は昨日の夜から降り出し、弱くなつてはいるが昼休みになつても降り続けている。

だから今日は屋上での昼飯はなし。おとなしく教室で弁当を食べている。

「今朝なんて髪が纏まらないから全然三つ編みができないし」

そうグチりながら玉子焼きを半分かじる。

「なら、しなきやイイじゃん三つ編み」

オレも自分の玉子焼き（結城のと違いかなり茶色い）を一口で頬張る。

「うーん……それじゃ、たまにはイメチェンしてみますか」

箸をキレイに揃えて小さい弁当箱（腹が膨れるとは思えないサイズ）の上に置くと、言葉通り三つ編みを解き始めた結城。

そしてその光景を、オレは白飯を食いながら眺める。

「つーか、イメチェンなんてレベルじゃねえよな。」

オレの一番古い記憶の中の結城は、もう既に三つ編みだった。多分、幼稚園くらい。

だからこれはイメチェンというかキャラチェンだ。優等生・結城真実というキャラクターの崩壊だ。

そう考えると急に不安になってきた。やっぱりやめねえか、と口にしようとして、

「はい、完了」

結城は作業を終えた。

「……………」

……………。

……うん。誰ですか、この清纯系女子は？

「ん？ どうかした？」

結城が小首を傾げる。長く綺麗な黒髪が少しだけ揺れる。

「あ、いや、その、さ……」

キャラ崩壊どころか別人出現だった。

「ただ、オレの心は富士山の頂上で「カミサマありがとー！」と叫んでいた。

なんとオレの幼なじみは、物語のヒロインだったのだ。これを感じたくないヤツにはバチが当たる。

しかし、あともう一押しほしい。たとえば。

「眼鏡も外してみたらどうだ？」

「こ、こう？」

次の瞬間、オレの魂はエベレストの頂上で叫んでいた。

カミサマ、あんた最高だ。今まで信じてなくてゴメン。眼鏡外しただけで様変わりって昔のアニメかよ、とほざく輩はあんたの代わりにバチを与えとくよ。燃えて、伸びて、増えて、月に代わってお仕置きしとくよ。多分スカウターが割れちゃうくらいの今のオレのパワーなら、できると思うから。

「……智流くん！ はい、あーん」

自分の弁当箱からおかずを一つ箸で取ると、そうやってオレに差し出す結城。

……。

……。

……何、このイベント？

前言撤回。カミサマ、あんた最低だ。エベレスト以上に高い山なんて、ここ以上にあなたに近い場所なんて、地球上には存在しないんだぜ。知ってるだろ？ カミサマなら。あいにくオレは空を飛べない地球人なんだ。これ以上の感謝の仕方、知らねえんだ。だがまあ、そのサプライズな優しさはありがたく受け取っておくぜ。据え膳食わぬはなんとやらだ。正々堂々・正面突破が男の誇りだ。だが

しかし、周囲の目が気になるのも事実。オレの視界に入る分には、こっちを見てるヤツは……いない。いや別に、結城と付き合ってることが恥ずかしいわけじゃない。別段言いふらしたことはないが、訊かれたら付き合ってる胸を張って言える男だ、オレは。そして礼儀正しい男だ、オレは。目には目を、歯には歯を、あーんにはあーんを。さあ、心の準備は整った。いよいよ本番だ。もちろん、本番に変な意味はない。そんな紳士にあるまじきことを考えるオレではない。現代のサムライと言っても過言ではない。だからサムライらしく、いざ尋常に。

「ピーマンなんぞ食えるかいっ！」
ツッコんだ。

「あれ？ ピーマンだった？ 眼鏡なくてよく見えないからプチトマトと間違えちゃった」

と、小さく舌を出す結城。

「ウソだ！ 眼鏡なくてもカラーリングで分かるだろ！ 三原色の違いくらい分かるはずだ！」

……くそう、見た目カワイイのに性格カワイくない。

清纯系っつーより小悪魔系だ。

「ところでさ」

そのままピーマンを自分の口に運ぶと、結城は話題転換した。

「最近、智流くんおおがみ大神先輩と仲良いよね」

「ん？ ああ、まあな」

「どうしたの、急に？ このあいだまで名前も覚えてなかったのに」

「……色々、あつてさ」

「色々？」

「そう、色々。三原色丸出しなくらい色々」

「それは随分とカラフルな色々ですな」

そう言って、結城は一応納得した。いや、納得したようにオレに見えた。

結城は一度、サキユバスを 夢魔という悪魔を宿している。小

悪魔や睡魔どころでなく、本当に悪魔を。

『一度でも“僕ら”に関わると、どうしたって引かれやすくいや、惹かれやすくなる』

その言葉通りなら、結城も例外じゃない。だけどその記憶がないのなら、後遺症は少ないはずだ。

結城には、夢魔が宿っていた自覚がない。知っているのはオレとヴィアンだけだ。ヴィアンは完全な吸血鬼“もどき”だし、オレはその血が半分流れる人間だから、どうしたって“ヤツら”に引かれる。だけど、結城は何も知らない。だから、知るべきじゃない。知らない方がイイ。今も狼男を宿している大神さんとの関係を、詳しく教えるわけにはいかない。

「でもさ」

眼鏡を掛け直した結城が、その行動を少し残念に思うオレに話を続ける。

「周りの目というか噂というか、そういうのも少しは気にした方がイイよ」

「噂？ ……もしかして、まだ狼男の噂とか流行ってるのか？」

また大神さんの意識がトんだりしてるのか？

「あ、いや、そういう話じゃないんだけど……ゴメン、忘れて。大した話じゃないし、私は智流くんのこと信じてるから」

「ん？ まあ、よく分かんねえけど信じとけ。俺は現代のサムライだからな」

「サムライ？ なんの話？」

「こつちの話。言うなれば男の話」

「『男』の話、なんだ……」

オレがこの『噂』を知ることになるのは、知るべきじゃなかったと後悔するのは、もう少し後の話になる。

承・追

「失敗しました。傘を持ってきてしまいました」

帰りのHRが終わると、眼鏡も髪型も元通りの結城ゆじきがそう嘆いた。「は？ 持ってきてんだから失敗じゃねえじゃん。朝から雨なんだし」

結局、放課後になった今も雨は降り続けている。だけどかなり弱くはなっているから、もうすぐで止みそうだ。空も大分明るい。

「いや、忘れてたら智流ちりゅうくんの傘と一緒に帰れるかなあ、と思いまして」

「……………」

……………何、その一撃？

相合傘。それはクラスのヤツらが悪戯で黒板に書くモノ。男子と女子の名前を左右に書き、当人に嫌がらせをするモノ。当人は「何書いてんだよ、やめろよ。早く消せよ」と嫌がつてみるが、実際相手が意中の女子だった場合はまんざらでもないモノ。じゃねえよ。リアルだよ。リアル相合傘だよ。今まで何度も結城としてきたヤツ（基本、傘を忘れるのはオレだが）じゃねえかよ。何焦ってんだよ、オレ？

「わ、悪い！ きよ、今日用事あるんだ！」

さすが、オレ。冷静極まりない。

「べ、別に相合傘がハズイとか、そういうのじゃねえんだ。ほ、ホント、マジで用事があるんだ」

さすが、オレ。声が裏返ることもない。

「ま、毎日会いに行くって約束してるから、行かないわけにはいかねえんだ。って言っても、き、昨日は大神おまがみさんが家に来たから行けなくて、だ、だから今日は絶対行かなくちゃいけないんだ」

さすが、オレ。一度も噛んでいない。

「へえ……ふうん……そお……」

だから結城さん。そんな目でオレを見ないで。

「イイよ、別に。私は智流くんのこと信じてるから。たとえ 約
束の相手が女の子でも」

…… エスパーですか、結城さん？

「いや、女の子って言っても全然小さい女の子だから。サイズ的に
は鱗ぐらいの小ささ。目から落ちちゃうぐらいの小ささだから」

「つまり、目に入れても痛くないカワイさ、ということ？」

と、結城は笑顔で訊く。

その笑顔が、オレには怖い。

「まあ、ホントに気にしないでイイよ。私は智流くんのこと信じ切
ってるから」

それに、と言葉を続ける。

「約束を守ってくれない男の子、私嫌いだから」

その笑顔は、怖くはなかった。

舞台移動。

病院からの帰り道。薄暗い空。雨はようやく止んでいた。

「はあ……何してんだろ、オレ？」

畳んだ傘を片手にオレは呟いた。

せつかく面会に行ったのに、あまり話の相手をしてやれなかった。
結城に言われた『目に入れても痛くないカワイさ』が心のどこかに
あつて、なんとなく変な気分になった。

……一応、念のため、もしもを考えて言っておくが、オレは別に
ロリコンじゃない。

まあ確かにアイツは『カワイイ女の子』ではあるけど、それはあ
くまでもガキとしてカワイイだ。それにカワイイで言ったら一番は
結城だ。つてのは完全にノロケだよなあ。

「いかん、いかん」

自分の頬を軽く叩き、緩みかけた表情を引き締める。オレは道端でニヤニヤするような男じゃない。

そして改めて前を見た。その視界には見覚えのある人物がいた。

「……魚住さん？」

世界ランク第二位こと、魚住さんだった。間違いなく、魚住さんだった。

「……魚住さん？」

「……魚住さん？」

顔面蒼白。その四字熟語通り、魚住さんの顔面は蒼くて白かった。その唇は激しく震えていた。よく見れば身体全体が震えていた。いつもの魚住さんのイメージは欠片もなかった。

「こんなところでどうしたんですか？」

強い違和感を感じ、魚住さんの立っている橋の真ん中まで駆け寄った。小さな川の上の小さな橋。だけど昨日からの雨で下は結構な水位の激流になっていた。

「お、女の子……お……溺れ、て……そ、そこ……」

放心状態の目でオレの顔を見ると、魚住さんはそう言った。その口からはガチガチと歯がぶつかる音がする。

橋の下を見る。そこには黄色いレインコートを着た小さな女の子の姿があった。しかし、その下半身は激流の中。かろうじてコンクリートで補強された土手にしがみついているが、今にも流され、濁った水の中に消えてしまいそうだ。

「た……助け、て」

そんな言葉を小さくこぼすと、魚住さんの身体はゆっくりと倒れていった。

「魚住さん！？ 魚住さん……魚住さん！」

橋に完全に倒れる直前、オレはその身体を抱き止めた。思った以上に軽く、女性特有の柔らかさがあった。

「……魚住さん？」

「……魚住さん？」

魚住さんの 意識がない。

とりあえず、荒々しいが息はしている。激しく胸が上下している。
……くそ、どうする？

腕の中には、意識を失った息苦しそう女性。橋の下には、今にも溺れてしまいそうな女の子。

どうする？ どうする？ どうする？

二者択一。だったら。

「薄原くんは先生の介抱を！ 僕が女の子を助けに行く！」
駆ける人影がそう叫んだ。

あつという間に、一直線に、狼のような速さで女の子に駆け寄る人影。そしてその大きな手で、女の子を激流の中から力強く抱き上げた。

狼男。味方ならなんて心強いんだ。

泣きじゃくる女の子を優しく抱え、ゆっくりと、しっかりと、土手を上げる大神さん。

二者択一。だったら二人で二つを選べばいい。

だから、次はオレが。

「魚住さん！ 大丈夫ですか!？」

軽くゆすつてみるが、返答はない。ただ苦しそうな呼吸音だけが聞こえる。

「魚住さん！ しっかりしてください、魚住さん!！」

今度は少し強くゆすつてみた。しかし変わらず、返答はない。ただしパラパラと何かの数枚、地面に落ちた。

「なんだ？ なんだ、コレ?」

オレは、自分の手の平に落ちた一枚を見た。薄く、青く、鮮やかな流線形の何か。それはまるで。

「……鱗?」

次の瞬間、オレの目に映ったのは青い鱗に変質していく魚住さん

の腕だった。

* 転 *

「マーメイド」

例によって例の如く、ヴィアンは開口一番そう言った。そして続けて、

「何度も言うようだけど、僕は専門家じゃないから正確な情報じゃないかもしれないけど、それは承知していてね」

と、お約束の前置き。

「マーメイド、つまりは人魚。半人半魚の美しい女性の姿で、特に童話の『人魚姫』が有名だね。まあ、男性の場合は魚人というカタチになるんだけど、こっちの方は美しいとはとても言えない。……確かに、船乗りの男の目撃例が多いから“美しい女性”って要素が重要だったんだろうね。ちなみにマーメイドの正体は、ジユゴンやイルカつてのが有力。日本に伝わる人魚伝説には体長十一メートルなんてのもいるから、おそらくそれはクジラで間違いないだろうね」

それはまさに『立て板に水』といったような喋りだった。しかし。

「オレが聞きたいのはそんなことじゃねえよ。魚住うおずみさんに宿った人魚が、魚住さんに何をしてるのが聞きたいんだ。意識が戻らないのは、そのせいなんだろう？」

「うーん。意識の方とはかく、呼吸困難は間違いなくマーメイドの影響だろうね」

「呼吸、困難……」

下を向く。そこには公園のベンチに横になった魚住さん。その息は相変わらず絶え絶えで苦しそうだ。

……あれから。

あれから、大神おおがみさんは助けた女の子を慌ててやってきたお母さんに引き渡した。そして急いでこっちに駆け寄って、

「薄原うすはらくん、先生は大丈夫かい!？」

息一つ切らさず尋ねた。

「いえ、何度呼んでも意識が戻らなくて……」

対して腕の中の魚住さんは、激しく荒い息しかしていない。

まるで、溺れているかのように。

「それに、コレ……」

そう言つて、オレは魚住さんの腕を見せた。指先から肘の辺りまで青い鱗に覆われた右腕を。

「これは……病院、というわけにはいかないようだね」

さすがは狼男に変身した経験がある大神さん。一瞬だけ驚いたが、すぐ冷静にオレと同じ結論を出した。さらに続けて、

「確か、近くに公園があつたはずだ。とりあえず先生をそこに運ぼう。この天気なら誰もいないだろうから、人目を気にすることもない」

言うや否や、大神さんはするりと魚住さんを背負い、そしてすぐさま歩き出した。一足遅れてオレもその横を歩く。……なんの手伝いもできないが。正直、オレじゃ大神さんみたく軽々と魚住さんを背負つて歩けないし、二人で担ぐのもバランスが悪い。ホント大神さんがいて良かった。

「そういえば大神さんはどうしてあそこに？」

こっちは大神さんの家の方向じゃないし、ここは学校の近くでもない。いくらなんでも都合が良過ぎる登場だ。

「実は、匂いがしたんだよ」

歩みを止めず、頭だけオレに向けて大神さんが答える。

「匂い？」

「ああ、匂い。うまく言葉で説明できないのが残念だが、きっとこれは“彼ら”の匂いなんだと思う。僕と同類の匂いを感じるんだ。

多分、後遺症の影響だろう」

さすがは狼の嗅覚。妖怪アンテナならぬ妖怪センサーといった感じだ。

「その匂いを学校を出るときに感じて、追ってみたら薄原くんと先生がいたというわけだ。おそらく、匂いの元は先生だろう。現に今、非常に強く感じるしね」

と、大神さんは背中の中を魚住さんをチラリと見た。未だ意識は戻っていないし、呼吸も荒いままだった。

「そんなことよりも薄原くん、ヴィアンちゃんに連絡を」

「あ、スイマセン。今電話します」

慌ててケータイを取り出し、家に電話を掛ける。雨が嫌いなアイツは多分いるはずだ。

「ところで、公園の場所は分かるかい？」

コール中、そう訊かれたので、

「大丈夫です。約束の公園なんで」

そう答えた。

……………

……………で、今に至る。

電話にはヴィアン本人が出たから、すぐに大体の経緯を話し、そして公園に来るように言った。公園はウチの近く。オレたちが着いたときにはヴィアンはもう既にいた。

「とりあえず、ここに寝かせてあげて」

公園内の屋根のある休憩所に案内すると、ヴィアンは自然に自分の上着をそのベンチに敷いた。雨で濡れてないところを選んだのと、そういう行動はさすがに大人だった。……………悔しいが、オレにはできない。

それでね、と専門家“もどき”は説明を続ける。

「マーメイドに対する願いは美貌や美声なんてのもあるけど、彼女の場合は最もポピュラーなヤツだね」

「ポピュラー？ なんだよ？」

「呼吸、さ。魚のように水中で息がしたい。そして思うままに泳ぎ

「回りたい」

「呼吸……」

視線を再び落とす。そこには変わらず息苦しそうな魚住さん。さつきより悪化している気がする。

「でもね。人体の構造上、そんなのは無理なんだよ。イルカやクジラならまだしも、魚になんて人間はなれはしない」

なのに願った。だから中途半端に叶った。

「人間の肺で魚みたいな呼吸。魚には濃過ぎる空気ですぐ息がままならず、人間なのに地上で溺れてしまう」

所詮はマーメイド“もどき”なんだよ、と吸血鬼“もどき”は静かに笑った。

「で、どうすれば魚住さんを助けられる？」

「助ける？ それはマーメイドを退治するという意味でイイのかい？」

「当たり前だ。それ以外の意味はねえよ」

「……マーメイドの力の表面化が弱過ぎるから、僕がここで咬みついても効果は薄い。だから先生の夢に入り込んで本体を叩く、つてのが有効手段だろうね」

「『夢神楽』か……分かった。準備するぞ」

と、オレは落ちていた石ころを拾った。休憩所の地面はコンクリート。石ころでも白線くらいは書ける。『舞台』さえ整えれば、オレにはそれで十分だ。

しかし、対するヴィアンは全く動かなかった。動く気配すらなかった。その代わり、

「本当に」

と、口を動かした。

「本当に、助けに行くのかい？」

ヴィアンが言った。いつもの小馬鹿にしたような、ヘラヘラとした顔はそこにはなかった。

「本当に、彼女の夢に入るのかい？」

「ここでようやく、質問されてるんだと気付いた。語尾に『?』が付いていることが分かった。だけど、その意味はまだ理解できてない。「真実^{まみ}ちゃん^{ちゃん}は幼なじみ。大神くんはやむを得ず。だけど先生は?」……は? 何、言ってるんだ?」

「ただの学校の先生だろう? 君にとってそれだけの」
「てめえは相手を選ぶのかよ!」

オレは怒鳴りながらヴィアンの胸倉を掴み掛かった。かなり大声だ。人が来ないかの見張りで、少し離れたところにいる大神さんさえ振り返るほどだ。

「だけど、ヴィアンは眉一つ動かさなかった。それどころか口元だけ笑って、

「選ぶさ 守るべきもののためなら」

そう言った。その目は、笑っていなかった。

「正直言って」

と、ヴィアンはオレの手を振り解いた。とても戦わない男とは思えない手際の良さで。

「マーメイド化の進行が早過ぎる。普通は、もっとゆっくりなんだ。だから明確には言えないけど……おそらく三十分」

「三十分……」

ヴィアンの言葉を繰り返す。それが何の時間か分からず、いや、本当は分かっている。次になんて言うかくらい分かっている。だけど、その予想を否定したい自分がある。

「あと三十分以内に、彼女の呼吸は停止する。文字通り、息絶える」
「……………」

予想は、当たりだった。当たってなんかほしくねえのに。

「もし、夢に入り込んでいる間に彼女が死んだ場合、君の精神も同時に死ぬ。ここには肉体という抜け殻だけが残る。そうなれば、君はあの子との約束は果たせない。それでも、先生を助けに行くかい?」

「……………」

言葉が出ない いや、出せない。答えを、出せない。……違う。答えなら出てる。とづくに分かつてる。

死ぬのは怖くねえ、とかカッコイイことは言わないし、言えない。普通に怖い。オレはロボットのパイロットでもなければ、海賊でも忍者でもない。所詮、少し普通じゃないだけの高校生だ。当たり前には怖いもんは怖い。

だけど、それ以上に約束を果たせないのが怖い。アイツを、助けてやれないのが怖い。

「チル兄ちゃん 助けて」

アイツは、この公園でオレにそう言った。

だから、約束したんだ。たとえ、もうアイツが覚えてないとしても。

助けてって言われたんだ。だから、助けるんだ。

「お、女の子……お……溺れ、て……そ、そこ……」

「た……助け、て」

……。

……なんだよ。魚住さんも言ってたんじゃねえかよ。

女の子が流されそうなときに。自分も大変なときに。

魚住さんは、確かにそう言った。

助けて、って言った。

多分、女の子のことだ。だけど、それは大神さんが果たした。

だから 次はオレが。

「約束、する」

ようやく、口から言葉が出た。答えが、決意に変わった。

「約束？ 何のだい？」

「魚住さんを助ける。アイツも助ける」

二者択一。だったら。

「オレは二人とも必ず助ける」

一人で二つ選んだってイイじゃねえか。

「オレは、オレ自身にそう約束する」

「……………」

堂々と“宣言”を果たすと、ヴィアンは黙った。そして黙ったまま笑った。

「いやあ、いつにも増して利己主義者だねえ、君は」

「……………悪いかよ？」

「いいや。人間はそう在るべきだよ」

そう在ってこそその人間さ。

「さて、それじゃあ先生を助けますか」

そう言って、ヴィアンも自分の足元の石ころを拾った。

「なんだ？ お前も来るのかよ？」

「ん？ そうだよ。だって、家族みんな揃わないと晩ご飯食べられないでしょ」

「……………オレはその程度の存在かよ」

「いやいや、大事なことだよ。僕にとって空腹は万死に値するんだから。いくらお腹が減っても死ねないなんて、地獄以外の何物でもない」

だから、とヴィアンは続ける。

「もし、これ以上は無理だと判断した場合、あの時みたいに君を連れ帰るよ」

……………あの時。アイツを助けてやれなかった時。オレがどうしようもなく力不足だった時。

だけども。

「大丈夫だ。その必要はねえよ」

もう、あの時のオレとは違う。もう、繰り返したりしない。

「それにさ。お前、知ってるか？」

そう言ったオレの顔は多分、意地悪く笑ってると思う。

「約束守れない男は、嫌われるんだぜ」

* 結 *

「なんだ、ここ？」

オレは思ったままを口にした。

そこは、津々浦第^{つづな}二高校の屋外プール。全体を囲うフェンスこそないが、確かにここはウチの学校のプールだった。そして、きつちりとした長方形のその縁にオレは立っていた。

しかし、それが存在する場所が異常だった。見渡す限りの穏やかな青い海と、太陽の煌めく雲一つない青い空。正直、どこが水平線なのか迷うような光景。そんな世界の真ん中に、まるでどこからか切り取って、貼り付けたようにプールがあった。

「おい、ヴィアン」

この風景にはどんな意味が、と言おうとした瞬間、隣にヴィアンの姿がないことに気付いた。アニメ的にいうなら点線で表された残像。前に目をやる。

ヴィアンは 溺れていた。一切の抵抗なく、ただ静かに目の前のプールに沈んでいつている最中だった。

「 なっ、何やってんだよ、バカ！」

慌てて手を水の中へ突っ込み、ヴィアンの襟を掴む。そしてそのまま勢いよく引き上げた。なんとなく小学校の学芸会の『大きな力ブ』（ちなみにネズミ役。もちろん身長の関係ではない）を思い出す動作だ。

「ぶはっ……はあはあ、死ぬとこだった……」

オレの横に這いつくばる水浸しの吸血鬼“もどき”が、息も絶え絶えにそう吐いた。いつになく真剣な目。どうやら本気でヤバかったらしい。

「まさか踏み込んだ瞬間に水中とは……さすがの僕も予想してなかったよ」

「つーか、なんでお前だけ落ちてんだよ？」

『夢神楽』を完成させ、オレたちは同時に魚住さんの夢に入り込んだ。つまり今ここは魚住さんの夢の中。この異常で異様な景色が、深層心理に宿る想い。

ちなみに、大神さんには残ってもらった。

意識のない人間が公園に三人も横たわっているのはさすがにマズい、というのと「精神世界は“僕ら”がより完全に近くなる場所だ。ウルフマンがまだ宿っている君を連れていくことはできない。もし暴走でもされれば、今度こそ誰も助からない」という理由で見張り兼お留守番だ。

「……多分、歩幅の問題だよ」

と、濡れた長い髪的水分を両手で弾きながらヴィアンは言った。

「僕とチルチルくんとは脚の長さが、根本的に身長差が」

「うるせえ、黙れ、溺死させるぞ」

「……うん。それは冗談にならないから素直に黙ろう」

「つーかさ、もしかしてお前、泳げねえの？」

そう訊くと、ややあつてからヴィアンはゆっくりと視線を周りに広がる海へと逸らした。

「ち、違つんだよ。ほら、今の僕は“ほぼ”吸血鬼だから、せ、聖水とかの本来の弱点が有効化されているんだよ」

「へえ……ふうん……そお……」

どうやら、この“ほぼ”吸血鬼は聖水じゃなく塩素消毒水でも殺せるみたいだ。

「火もダメ、水もダメってホント使えねえな」

「……返す言葉がございません」

と、未だ海から視線を外さないヴィアン。おそらくだが、それはカメラ目線ではない。

「つーか、溺れた場合、お前は死ぬのか？」

死ねないヴァンパイアでも。

「うーん。『死ぬ』というのとは少し違うかな」

ヴィアンが顔をこっちに戻す。話題が変わったことを察知したようだ。

「呼吸ができずに死に続け、その度に生き返る。復元されてしまう。空腹と一緒にさ。無限の地獄を“死ぬまで”味わうことになる」

だから僕は火も水も空腹も怖いんだよ、とわざとらしく嘆いた。そしてもう一度海を、周りをぐるりと見渡した。

「……それにしても、すごい景色だねえ。絶海の孤島ならぬ絶海のプールといったところかな」

四方八方水責めだ、とヴィアンが笑う。

「まさに待ったなしの逃げ場なし。僕にとっても 彼女にとってもね」

「どついう意味だ？」

「それはね」

と、ヴィアンが語り出そうとしたときだった。ジャブンという水の音が聞こえたのは。

「っ！？」

反射的に音の方向を、プールを見る。そこには同心円を描く波紋だけが広がっていた。

「さあ、いよいよマーメイドのお出ましみたいだね」

そう言って立ち上がったヴィアンの身体は、もう濡れていなかった。……そうだ。精神世界こしちがわは“ほぼ”なんでもアリだ。人も、物も。読者が付いていけないような場面展開も、時間軸を無視した突然の回想シーンだって。

「さて、頑張つてよチルチルくん。今回はなかなか手強いからね」
「なんたって。」

「相手は　トラウマだ」

今度はザバンというド派手な音と豪快な水しぶきと共に、オレのすぐ近くの水中から影が一つ、宙に飛び出した。ガキの頃見に行っていたイルカショーを思い出す映像だ。

そして鮮やかにプールの縁に座り込むように着地すると、第一声

。

「お兄ちゃん、遊ぼうよ！」

無邪気な笑顔で、彼女はそう言った。

……………

…………… 曲線美。

彼女の姿を目の当たりにして、オレはその意味を理解した。

曲線美とは、女性のためにある言葉なんだ、と。

陶磁器のように白く、力加減を誤れば折れてしまいそうに細く、
だけどしなやかな強さのある首筋。

熟れた果実のように丸々と、スイカやメロンというよりグレープ
フルーツみたいなの、決して重力に負けることのない胸元。

ひょうたんや砂時計を彷彿させる、まるで反比例のグラフのよう
に、しかしあくまでも自然なラインを描く腰回り。

熱帯魚さながらの鮮やかな青い鱗に包まれた、イルカのように滑
らかな下半身　　というか尾ビレ。

そう、彼女は人魚だった。

しかし、一般的なイメージとは大きく違う。

下半身は魚で、上半身は人間。これは合っている。だけど人間の
部分に問題があった。

貝殻的なモノでなく、競泳用水着を着ているのだ。

よって、肌の露出は極めて低い。見えるのは肩から下と、首元か
ら上だけだ。

だがしかし、どうだろう？　これはこれで。

隠れているとはいえ、曲線美と言うに相応しいそのボディライン
ははつきりと見えている。

下手に露出しているより、想像力が働く。

その黒光りする布キレの向こう側への、好奇心が騒ぐ。

得体の知れない感情が、心の奥底から沸き上がってくる。

……もしかや？ もしかして？

もしかして、これが？

もしかして、これが男子高校生なら誰しもが秘めているという、あの有名な感情なのか？

その名も。

「おい、ミチル。何勝手にモノローグ語ってやがる」

「あれえ？ バレちゃった？」

そんな声は、当然のように足元から聞こえた。

そこには オレがいた。上半身だけ床から生えていた。……いや、正確には床に落ちたオレの影から、だけど。

「でも安心して。ボクらは声も一緒だからモノローグ入れ替わったって問題ないよ」

「問題大アリだ。そんなことしたらオレはこの世界にいらなくなる」

ここにきて主人公交代なんてできるか。

「え？ それってアレ？ 『説明口調のツツコミが、オレのこの世界での立ち位置なんだよ。それこそ、オレがオレである理由だよ』ってヤツ？」

「……………」
「ハズい。」

オレ、そんなこと言ったのか。しかも全く同じ姿のミチルが言うから余計ハズい。さらにコイツのことだから口調まで完コピだろう。

「ねー、ねー、ねー、ねー！ 遊ぼー、遊ぼー、遊ぼー、遊ぼー！ ペチペチと床を尾ビレで叩きながら、輝く目でオレを見る人魚いや、その顔も身体（体格的に）。変な意味はなし）も魚住さんだった。」

「プールの中でできる遊びなら、なんでもいーよ！ 何する？ 何

する？ 何する？」

しかし、その口調は身体に合わない幼児的なモノ。むしろ身体の方が中身に合っていない感じがする。

「劇的な進行速度と、この閉ざされた世界。それに加えて精神年齢の低さ。彼女は間違いなくトラウマから生まれたマーメイドだ」

人魚から視線を外さず、ヴィアンはオレに言った。

「トラウマ？ アイツのとは違うのか？」

オレも人魚を見ながら訊く。

似たような状況なら、オレも知っている。どうしようもなく知っている。忘れることが許されないほどに。

「ああ、あの子のは全くの別物さ。事が起きる前の対応と、起きた後の対応。何も覚えていないのと、何も忘れられないという違い……だけど、どちらにも共通するのは根源的な強い願い。願ひ。そしてその強さは即ち“僕ら”の強さになる」

だから、彼女は手強いよ。

と、言い切る直前、

「ねーねー、むずかしい話しないでー。アタシ分かんない」

口を尖らせて分かりやすく拗ねる人魚が、会話に割り込んできた。その表情と口調はいつもの魚住さんと大きなギャップがあり、そのせいで軽く萌 いや、なんでもない。

「はあい。今終わるから、ちよつと待つてねえ」

子どもをあやすように、体操のお兄さんのように、ミチルがそれに答える。その姿は未だ上半身だけ生えている状態だが、人魚が特別それに驚く様子はなく、「はーい、アタシちよつと待つてるー」と明るく元気に返事をした。

「……っーか、この人魚はなんでこんなにガキっぽいんだ？」

身体は……ミチルの言う通り、確かに大人の『曲線美』なのに。

「おそらく生まれたときから、トラウマになった出来事から時間が止まっているんだよ。要は先生の心が前に進もうとしてないってこと」

まあ、だからこそトラウマなんだけどね。

と、ヴィアンは苦笑した。

「で、さっきから言ってる『トラウマ』って何なんだよ？」

そう質問すると、一瞬首を傾げてから、何か閃いたように「ああ、それはね」と口を開くヴィアン。

「トラウマ、心的外傷。外的内的要因による衝撃的な肉体的、精神的ショックを」

「そんなを訊いてんじゃねえよ。そのくらい分かるっつーの」
いや、ちゃんと詳しくは知らないけど。

だけど、そんな説明を求めているんじゃないことくらい、コイツにだって分かっているはずだ。だから時間も惜しいことだし、礼儀正しいオレはしっかりとしたお願いをする。

「お前、沈められるなら海とプール、どっちがイイ？」

「……………ごめんなさい」

うん。やっぱり人間、素直が一番だ。まあ、コイツは吸血鬼“もどき”だけど。

「……………でもまあ、入るならどちらかと言えば海かな。なんたって

トラウマの原因を本人から聞き出せるからね」

そう言つと、ヴィアンは海に向かってしゃがみ込み、その手を海面に近付けた。すると途端に、

「だめ！ 海に入っちゃだめ！ プールにしよ！？ プールにして

！ 海は、海は」

静かにしていた人魚は慌てて制止した　いや、制止しようとした。

ちやぷん。

だけど、そんな静かな音を立ててヴィアンの指先が海の中へ入った。

その瞬間、何の前触れもなく唐突に、予想すらできないほど突然に、世界は表情を変えた。

「海は、溺れちゃうよー!」

荒れ狂う灰色の海と、冷たい雨を降らす暗い空の中、彼女はそう泣き叫んだ。

* 結・続 *

『たすけて』

と、いう声は海から聞こえた。

このプールを四方八方から責め立てるような荒波から、小さな女の子の声が、確かに聞こえた。

「いや！ 違うの！ 助けたいの！ アタシは 助けなかったの！」

青ざめた顔の人魚が叫ぶ。その身体はガクガクと震え、まるで気を失う直前の魚住さんのようだ。

しかしその叫びは届かず、何度も何度も声がこの世界に響く。

『たすけて』 『たすけて』 『たすけて』

『たすけて』 『たすけて』 『たすけて』

『たすけて』 『たすけて』 『たすけて』

『たすけて』 『たすけて』 『たすけて』

『たすけて』 『たすけて』 『たすけて』

と。

「助けたかった！ 助けたかったけど、息が続かなかったの。アタシも、溺れたの。だからお願い。お願いだから 許してよ」

歯がガチガチと触れ合う口から、そんな言葉を零れる。だけど、その声も相手には届かない。

それどころか、

『たすけて まなちゃん』

と、一層強い声が響くと共に、荒れる海から腕が伸びた。

小学生くらいの小さな手をした腕。それが全方向の波間という波間から無数に見える。

まるで 地獄に引きずり込まうとするかのように。

「いやあつ！」

途端、その身を翻し、あまりにも無様な水しぶきを立てて人魚はプールに飛び込んだ。いや、逃げ込んだ。

「……何が、起きてんだ？」

冷たい雨が降りしきる中、ようやくオレは疑問を口にした。

精神世界では“ほぼ”何でもアリだと知ってはいても、その全てを理解できるわけじゃない。それどころかこんな劇的な世界の変化は、まだ一度しか。今回を含めて二度しか経験したことがない。訳が分からないのは当然だ。

そんな疑問に、つまりはね、とヴィアンが話し始める。

「これが先生のトラウマ。マーメイドが生まれた理由。僕が『海』という対象に触れたことで、それが表面化したんだ」

まあ、何がトラウマの原因かはなんとなく分かるね。

「言い終わると、ヴィアンはオレの肩にポンと手を置いて、
「さあ、ここからが君の出番。早速あのマーメイドの『説得』をよろしく」

訳の分からないことを口にした。

「……、……説得、だと？」

「そう、説得」

首を縦に深々と一度振り、だって、と言葉を続ける。

「トラウマってのは心的外傷だよ。つまり彼女は傷口そのもの。まさか傷口を斬りつけるような真似、チルチルくんはしないよねえ？」
そんな男にあるまじき行為、とヴィアンは見定めるような視線をオレに送る。

それに対し、

「まっさかあ。だってチルチルは現代のサムライですよ。そんなことするわけないじゃないですかあ」

と、足元から生えたミチルが答えた。

「サムライ？ 何の話だい？」

キョトンとした顔のヴィアンに、ウキウキとした顔のミチルが、

「実はですね。今日の昼休みに」

「ミチル。それ以上言ったら殺す」

もしくは完全に封じる。

ホント、コイツは性格が悪い。とてもオレの半身とは思えないくらい悪い。

「はいはい。殺されたくないんで黙りますよう」

でもまあ、とりあえず。

「チルチルもボク以外に絶対殺されないで　ねっ！」

その言葉を合図に、ミチルはオレの両足の膝裏を勢いよく手刀で打った。

「なっ!？」

そんな突然のヒザカックンに対し、何の準備もしていなかったオレの上半身は当然のように下降を開始する。

そしてその直後、頭上を『何か』が通過する感覚が　いや、正確には頭頂部の髪の毛数本の中を通過する感覚があった。

何すんだ、このヤロウ!

という言葉は、口にはしなかった。

それは不格好ながら体勢を立て直し、なんとか途中で踏みとどまったからではないし、そんな些細なイタズラに怒るようなオレではない　というわけでもない(普通に怒る。っーか、キれる)。

理由は簡単。理由があるからだ。

ミチルは　いや“ヤツら”は理由を最重要にする。

それがなければ存在意義を　存在そのものを失ってしまうから。そして何より、根元からお別れした髪が、やや遅れてハラリと目の前を舞ったからだ。

「……ここから出てって」

そこに、幼い表情の人魚はいなかった。

プールのちようど中心辺り。ミチルと同じく上半身だけ水中から出し、唸るような低い声で、彼女はそう言った。

「アタシの嫌なことするなら、ここから出てって!」

途端、人魚の真横の水面に大きな泡が生まれる。

そしてそれがパチンと弾けるように扇状の膜へと形を変え、オレに向かって垂直に飛来してきた。

「っ！」

プールの縁の上、オレは一步だけ横に跳ぶ。

垂直方向の膜はそれで十分に避けられるし、そのスピードはとても速いとは言えないものだった。

しかし、

「……うわあ。ボクがヒザカツクンしなかったら、今頃チルチルの頭と身体のお別れパーティーだね」

オレの影と共に移動した（させられた）ミチルの言う通り、その威力はとても水とは思えない程、抜群だった。

さっきまで立っていた場所が、まるで元々存在しなかったように切断され、パツクリと割れていた。

「……何にも楽しくねえパーティーだな、それ」

実際、初撃をかわしていなければオレの頭は足元に転がっていた。クラッカーの代わりに、首から派手に血を噴き出していたことだろう。

さすがの吸血鬼の血でも、そんな圧倒的な致命傷には対応できない。残念ながらオレのはオリジナルの『復元』ではなく『治癒』だから。人間“もどき”であつても、吸血鬼“もどき”とは程遠い存在だから。

でもまあ、とりあえずは説得だ。今回は戦う必要なんてないんだ。だからまず、会話を。

「ゴメン、悪かった。もうしない、もうしないから」

「出てって!!」

オレが言い切るのを待たず、人魚は再度水の刃を放つ。しかも今度は連射。角度は様々だが、その全てがオレたちを狙っている。

「ちっ、説得以前に会話ができねえじゃねえか！」

仕方なく、ポケットから『無太刀』むたちを取り出す。さすが五戦目に

なると慣れた動作だ。……いや、慣れたくなんてなかったけど。

「斬れ『言乃刃』！」

居合いの要領で鞘を外した『無太刀』を　　当たり前のように存在する『言乃刃』を振る。

するとオレたち（残念ながらヴィアンの分も）に向かっていた水の刃は、霧となって掻き消えた。

当然だ。そうなるように望んだから　願ったから。人魚の水の刃と同様、この刀もある程度の理論を無視できる存在だ。しかも、その力は精神世界でこそ真価を発揮する。

『無太刀・言乃刃』。斬りたいモノを斬れる、刃の無い暗示の刀、ヴィアン曰わく『斬れない聖剣』。

しかし、ここでそれを出したのは失敗だった。

「ひっ！」

ビクリと体を竦ませ、驚きで目を見開き、声にならないほどの小さな悲鳴を上げて、人魚は水中へと潜った。

そして、その姿を見せることはなくなった。

静かな水面をしばらく眺め、はぁー、と深いため息を吐いてから、……軽率だよ、チルチルくん。見た目はどうあれ相手は子どもだよ？　刃物なんか見せたら逃げるに決まってるじゃないか

頭を掻きながら、苦い顔でオレを見るヴィアン。

「そうだよ。相手がいなきゃ会話どころか話し掛けることもできないじゃないかあ」

と、影から全身出てきたミチルも責める。

「うるせえな。出しちまったモノの仕方ねえじゃねえか」

「うわ、チルチルくんは女の子に対してでもそうやって言い訳するタイプだね」

出したモノは仕方ない、って。

「……………？　何のことだ？」

「……………ああ、いや、君には少し早い話だった」

ゴメン、忘れてくれ、と一方的にヴィアンは話を打ち切った。

……まあ、本気で何のことか分からなかったからイイけど。

「でもまあ、これで君はマーメイドと会うためにプールを潜ることが必要になった。だけど言わずもがな水中こそが彼女の領域で、水自体が彼女の武器だ。とても普通の人間が無事に辿り着けるような条件じゃあない」

「だけど、と吸血鬼の牙を見せながらヴィアンがニコリと笑う。

「幸いにも今の君は普通の人間ではないし、水中じゃなくて空中なら君の領域だ」

「……アレ、か……」

ヴィアンの言っている意味を理解して、オレは露骨に嫌な顔をす。ここで自分の顔を確認することはできないが、明らかにそういう表情をしていると思う。

だって『アレ』はすごく痛い。実際一度死ぬようなモノ。だからできることなら使いたくない手段だ。

「……よし。頼む、ヴィアン、ミチル」

「……よし。頼む、ヴィアン、ミチル」

大きく決意の息を吐き出すと、オレはヴィアンとミチルに背を向ける。その首は咬みつきやすいように、やや右に傾いた状態。

「了解。仰せのままに」

そしてオレの両肩をしっかりと押さえると、ヴィアンは首筋にその二本の牙を突き立てた。

「っっ！」

鋭い痛み。そして、そこから吸血鬼の血が 熱いとも冷たいとも区別できない得体の知れないモノが流れ込む感覚。しかしそんな痛みにも感覚にも、もう慣れた。

それに、本当に痛いのはこれからだ。

「はい、下準備完了」

ヴィアンが牙を抜き、背後から離れる。

それを見届けると、ミチルは両手だけを黒い影に戻し、本物の刀のように鋭利に変形させる。

そして

「それじゃチルチル。ちょーつとグサツとするけど、我慢してねー」
その手刀を何の遠慮もなく、オレの背中に手首まで深々と突き刺した。

「っ！！」

激しい痛みと衝撃にオレは歯を食いしばる。実際に背中を二本の刀で突き刺されているようなモノだ、痛くないわけがない。たとえ血の力で傷は瞬時に癒えても、その痛みまでもが消えるわけではないんだ。

そしてそんな激しい痛みを残しつつ、ミチルの全身が影へと戻る。しかしその身体は足元には戻らず、オレの背中に突き刺さったまま粘土のようにグニュグニュと形を変えていく。

イメージはコウモリの翼 吸血鬼にお似合いの翼。

「はあい、変身完了」

と、ミチルの声が背中から聞こえると同時に、今まで感じていた痛みがスツと消える。

そして、オレの背中にはイメージ通りの漆黒の翼が生えていた。

これが、本来交わるはずのない本体と影が一つになる儀式。オレ自身が理論を無視するためのモノ。

髪が金色に輝いて逆立ったりはしないが、一応これがオレのスーパーな状態。

「よし、飛行モードになったことだし、早速マーメイドの説得頑張つて」

そう言ってヘラヘラとした顔で、ヒラヒラと手を振るヴィアン。だけど、

「説得って一体何すりゃいいんだ？」

さつきは結局、話途中で最後まで訊いてなかった。つーか、説得なんてしたことねえんだけど。

「まあ、難しく考えなくていいよ。相手は何十年来のトラウマで、中身はどうあれ君より年上だ。どんな言葉を使ったとしても、君は

子どもなんだ」

悪い意味でも、イイ意味でも。

「だからチルチルくんは、言いたいことを言いたいようにガツンと言ってやればイイ。いわゆるシヨック療法ってヤツさ」

と言い終え、いそいそと授業を見学する生徒よろしく、ヴィアンはプールサイドで体育座りになった。まあ要するに、自分はこれ以上参加しないという姿勢だ。

「ガツンと、ね」

オレは自分の手を見下ろしながら、そんな言葉を繰り返す。

言いたいことを言いたいように言う。それなら明確に一つある。

「……よし、それじゃ行つてくるわ」

オレは地面を叩き付けるように一度大きく羽ばたく。すると、身体が少しだけ宙に浮く。

人間は飛べない、という理論を無視する。

人間は飛べる、という概念だけを持つ。

「悪い、カミサマ。オレ、嘘ついた」

そう呟くと、オレは一気にプールの上空に向かって飛んだ。

確かに地球人は空を飛べないが、地球人“もどき”なら飛べる。

エベレストより上にだって行こうと思えば行ける。

そしてプール全体を見渡せる場所まで辿り着くと、そこでピタリと止まった。

ちなみに、羽ばたき続けることはしない。この翼は『飛べる』という概念の塊。そんなことをしなくても空中に留まれるし、最初の羽ばたきだって単なるキツカケだ。

真下のプールを見下ろし、目を凝らす。しかし、水の反射で中は全く見えない。普通なら。

そう、今のオレは抜群に普通じゃない。“ほぼ”吸血鬼の血を注入された直後だ。まだ『治癒』に使っていない血のおかげで、ステータスの全てが跳ね上がっている。

だからその規格外の視力でプール全域を見渡し、カメラのズーム

のような視界で水中にいる人魚の姿を発見した。

結構深いところにいる。けど届かない距離じゃない。

しかしその直後、オレはその姿を見失う。

突如として水面に生まれた一つの泡が、視線を遮ったからだ。

さつき人魚が作り出したモノと同じ大きな泡。

それがそこを基点として瞬く間に増殖し、一秒掛からずにプール全面を余すところなく覆っていた。

「……嘘、だろ」

次の瞬間、残念ながらそれは現実となる。

一斉に、しかし時間差で、弾ける泡。そしてそれは予想通り、全て水の刃となつて空へと　オレへと放たれる。その光景はまるで弾幕シューティング。それも、食らえば一発でゲームオーバーの設定。

「シューティングやらねえんだけどなあ」

そう言いながらも、オレは頭から一気に下降を開始する。もちろん、目的地は人魚のいたところ。

本来の重力と翼の力を利用して、一気に落ちていく。向かってくる弾幕に対し、自ら距離を詰める。

そして刃の弾幕が目前まで迫ったとき、もう一度黒い翼を羽ばたかせた。それが『飛べる』という概念に、更に『高速で』という概念を追加するためのキツカケ。理論を無視したオレの、オレなりの理論だ。

直後、オレの身体はグンと急加速する。そして自分で自分をコントロールできる限界のスピードを保ちつつ、そのまま弾幕の中に突っ込んだ。

規格外の視力に、反則的な反射神経。それに加えて独自理論の高速飛行。

威力こそ絶大だが、水の刃のスピード自体は大したことはない。だからその全てを最小の動きでかわしながらも、オレは下へ下へと飛び続ける。明らかに普通の人間には不可能な動作を、一切の無駄

なく繰り返し続ける。

しかし沸騰しているかのような水面は、絶えず泡を作り、弾け、次々と刃を生む。

無限弾幕。しかも敵機の姿はなし。

だけど

「クリアできなきゃクソゲーなんだよ！」

目的の水面まである程度近付いたところで、オレは勢いそのままに『言乃刃』を縦に振る。

正確には『言乃刃』は水面に触れていない。斬ったのは空だけだ。だが、オレは今の一振りに『水“だけ”を斬る』という願いを込めた。

すると願い通り、目の前のプールの水がブロックのように大きく割れた。水の無い空間が、そこに生まれた。

それはプールという概念を無視した、海のような深さ。果てしなく暗い闇が、存在するか分からない底を覆っていた。

そしてその空間に、目的の姿はあった。

「こ、来ないで！」

勢いを一切殺すことなく突っ込んでくるオレに、人魚がそんな悲鳴を上げた。

その手と尾ビレは何かを求めるようにバタバタと動いている。しかし周りに水が無い以上逃げることもできず、その体はただただ重力に従って闇へと落ちていく。

よし、狙い通り。

確かにヴィアンの言う通り、水中で人魚に勝てるわけではない。

でも空中なら、オレの独壇場だ。『まな板の上の鯉』じゃないけど、水から引きずり出しさえすれば後はオレの自由。

だけど その自由はあまりにも短い。

斬り裂いた左右の水の壁の間隔が、みるみる内に狭まっていく。人魚のためだけの世界が元の姿に帰ろうとする。

もし今ここが水中に戻ってしまえば、オレに勝ち目はない。

チャンスは、一度きり。
さらに、失敗すれば生きてプールから脱出することすら危ういだろう。

でも、オレはもう失敗なんてしてられない。
もう二度と、失敗なんてしてやらない。

だから、

「『言乃刃』……解除」

オレは刀身の存在を消し、柄だけを握り締める。強く、硬く、拳を作るように。

そして一度、二度、三度と続けて黒い翼を羽ばたかせる。

速く、疾く、迅く。

そのイメージで、オレのスピードはあっという間に自分でコントロールできないレベルに達する。

でも、それで問題ない。

だって後はもう、人魚に向かって一直線に進むだけだ。

「いつまでも何抱え込んでんだよ、魚住さん！」

オレは言い聞かせるように、この世界全てに響くように叫ぶいや、吼える。

魚住さんの夢に入ってから、ずっと言いたかったことを言いたいように言う。

「こんなの、らしくねえじゃねえか！」

もっと明るくて、もっと大人で、もっと男前で、もっとフレンドリーで。

……分かってる。これが魚住さんの表面だって、ガキなオレでも分かってる。

だけど、だから、だからって。

それが言いたいことを、ガツンと、かましちやいけない理由じゃないはずだ。

去年から担任の魚住さんだから。

居眠り中に起こされ続けたオレだから。

「いい加減、目え覚ませよ！」

多分。

これが、ガキなオレができる精一杯の説得だ。

燃えたり、伸びたり、増えたり、誰かに元気をもらったりはできないけど。

それでもこれが、今までもらった元気の小さなお返し　いや、仕返し。

必ず“殺さない”技。

一応、これも『必殺技』だろ？

「鉄拳制裁！！」

現代のサムライは傷口を斬りつけることはしないが、残念ながら殴りつけることはするようだ。

「キツカケなんてのは、ホント些細なモノでさ。雨が岩を穿つこと
もあれば、何十年来のトラウマがたったの一言で癒えることだつて
ある。……ところで水と魚と言えば『水を得た魚』つて諺があるけ
ど、人の場合は何を得たら生き生きとするんだろっかねえ？」

「えー、突然ですが漢字の抜き打ちテストをしまーす」

教室に入るなり魚住さんうおすずみが最高の笑顔でそう言い放つと、クラス
の大多数からブーイングが起きた。無論、オレもその内の一人だ。
だけど、そんなことをしても無駄だつてオレたちでも分かっている。
魚住さんはやると言ったら絶対やる。

だから徐々に声の数は減り、完全に収まりかけた瞬間、先生何か
イイコトあったの、と女子の誰かが訊いた。

「ふふん、分かるか？ 実はな」

と、枚数を数えながら最前列にテスト用紙を裏向きで配り始める
魚住さん。

「昨日、小学校の時の同級生から『子どもが産まれました』つて手
紙が届いてさ」

そう笑顔で語りながらも一列、二列と用紙を配り続ける。そして
受け取ったヤツは自分の分を取ると、残りを後ろに回し始めた。

「ずっと会ってなかった友達からつてのにもだけど、もう私たちそ
んな歳なんだなあってのに驚いたわけよ」

全てを配り終えて魚住さんが教壇へと戻ったとき、ちょうどオレ
にも用紙が回ってきた。

だからオレも一枚取って後ろに回そうとして、

「ちなみに、先生は来月でアラサーからジャスサーになります。だ
からテストをします。文句あるか、この野郎？」

思わず手が止まった。つーか、クラス全員の動きが止まった。

……とんだとばっちりだ。

多分、みんなそう思ってる。

「まあ、私にはお前ら『教え子』がいるからイイけどなあ。寂しくないけどなあ。悔しくないけどなあ。」

あはははー、と恐ろしいほどの　つーか、恐ろしい笑顔で魚住さんが笑う。

そしてその顔のまま、

「はあー、どこかに違いの分かるイイ男は居ないもんかねえ、『薄原』？」

生き生きとした眼差しをオレに向ける。

だから違いの分かる男は、今度ははつきりとその問いに答える。

「オレに訊かないで下さいよ、『先生』」

なんとなく。何の根拠もない、ガキなオレのなんとなくだけで、

魚住さんはもう大丈夫な気がした。

だから、泡となって消えた人魚も、静かな海に無事帰れたと信じることになろうと思う。

第四話「V S ・とべないペガサス」に続く。

***終* (後書き)**

以上、もどきも第三話「vs.おぼれるマーメイド」でした。
楽しんで頂けたなら、この上ない幸せ。

また、ソレはないんじゃない的な意見や、感想・批評など頂けたら、鼻血大放出で千四号は喜びます。

ではでは、ここまで読んで下さった貴方に最大級の感謝を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177m/>

もどきども 第三話「vs.おぼれるマーメイド」

2010年11月21日13時10分発行